狂言 「麻生」 シテ：山本 東次郎

◆ 狂言 麻生
山本 東次郎

◆ 狂言 鐘の音
山本 則俊

◆ 狂言 通円
山本 則秀

◆ 狂言 若市
山本 泰太郎

大蔵流狂言

山本会別会

平成30年 4月30日（月・振替休日）

千駄ヶ谷 国立能楽堂

午後2時 開演（1時 開場）

《鑑賞券》
正面 7000円 脇正面 5000円
中正面 3000円 GB席 2000円

《お申込・お問合せ》
大蔵流狂言 山本事務所
東京都杉並区和田 1-55-9
TEL 03-3381-2208

《公演会場》 国立能楽堂
東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-18-1
TEL 03-3423-1331

大蔵流狂言 山本会別会

平成30年4月30日（月・振替休日）午後2時開演　国立能楽堂

麻生		
	麻生の何某	山本東次郎
	頭六	山本 則重
	下六	山本 則秀
	烏帽子屋	山本 則孝
鐘の音		
	太郎冠者	山本 則俊
	主	山本 則重
	仲裁人	山本泰太郎
通円		
	通円	山本 則秀
	旅僧	山本凛太郎
	所の者	若松 隆
若市		
	聖人	山本泰太郎
	若市	山本 則孝
	告げ手	山本凛太郎
	連尼	山本 則重
	連尼	山本 則秀
	連尼	山本修三郎
	連尼	水木 武郎
	連尼	若松 隆
	笛	槻宅 聡
	小鼓	田邊 恭資
	大鼓	佃 良勝
	太鼓	三島元太郎

◆麻生（あそう）

都での訴訟がすべて叶い、ようやく故郷の信濃の国に戻れることになって喜びもひとしおの麻生の何某、明日の元旦の出仕に備え、召使いの頭六は主人のために烏帽子・小袖・素袍上下を整え、習い覚えた烏帽子髪を結う。さて、烏帽子屋に新調の烏帽子を取りに行った同じく召使いの下六は、主の館に戻る途中、同じように正月のしめ飾りを付けた家々の中に主の館を見失い途方にくれる。

一昨年一月、国立能楽堂普及公演で我が家としてはおよそ百年ぶりに上演された目出度い脇狂言を再演する。

◆鐘の音（かねのね）

息子に刀の差し初めをさせようと思った主人は、せっかくなので金の熨斗付（刀の柄や鞘を黄金で飾ること）にしようと、付け金の値段を聞きに太郎冠者を鎌倉へ行かせる。「付け金の値」を「つき鐘の音」と勘違いした太郎冠者は、久しぶりに鎌倉へ行ける嬉しさとお仕えしている主人の子のために、鎌倉中を走り回り、寿福寺、極楽寺、建長寺の鐘の音に耳を澄ます。

◆通円（つうえん）

見聞を広げるために都へ上り、奈良へ足を伸ばす途中の東国の旅僧は、宇治橋のたもとの茶屋に茶湯が手向けられているのに気づき、所の人に謂われを尋ねる。その昔、通円という茶屋の主は宇治橋供養にやって来た大勢の客のために一人で茶を点て続け、そのために亡くなってしまったのだった。通円の霊を慰めるため、旅僧が弔っていると、通円の霊が現れ、三百人の客のために命の危うさも忘れて茶を点て続け、生きがいの中に死を迎えた様子を見せる。

◆若市（にゃくいち）

ある寺で針仕事を頼まれた尼の若市は、その寺の稚児に菊の花をあげようと持って出掛ける途中、聖人に出会う。かねてより若市に気のある聖人は、若市の手にした菊の花を見とがめ、自分のところの花壇から盗んだものだろうと言いがかりをつける。若市に抵抗され、癇癪を起こした聖人は花を取り上げ、引きむしった上、若市を打ちのめす。怒った若市は仲間の尼たちを引き連れ、逆襲に向かう。

大勢の尼が長道具を手に、横暴な聖人の権威の象徴である「帽子（もうす）」を叩き落とすという稀曲を二十八年ぶりに上演する。

狂言 「鐘の音」 シテ：山本 則俊

©YAMAMOTO KYOGEN